

岑参「春夢」詩解釈存疑

増 子 和 男

前 言

盛唐の詩人・岑参は、「辺塞詩人」の名をもつて語られることが少なくない。それは、詩人自らが二度、合計四年の長きに涉つて塞外に滞在し、その目で見、耳で聞き、肌で感じた事どもを詩に詠じたからであろう。確かにその詩は、表現としては伝統にのっとりながらも、臨場感において傑出し、読む者を惹きつけずにはおかない迫力と魅力とにあふれている。⁽¹⁾ 勢い、従来のも、とりわけ我が国の人々の関心は、より多く辺塞詩に集中しがちである。

しかし、それは岑参の作品の、あくまでも一側面―極めて突出した側面ではあるが―に過ぎない。

今日伝えられる、その四〇三篇の作品のうち、辺塞詩は、わずか七十数篇に過ぎず、しかも、彼の作品を評価するに際して頻用される評語「奇」もまた、元来は辺塞詩に向けて発せられたものではないからである。

それは、岑参とはほぼ同時代の人である殷璠が、自らの編んだ詞華集の『河岳英靈集』（巻之中）において、

岑参「春夢」詩解釈存疑

岑詩語奇体峻、意亦造奇

と評したのを嚆矢とするが、『河岳英靈集』に、辺塞詩と目されるものは一篇もない。

その伝統を引き継いでか、中国では我が国と同じく、岑参の辺塞詩人としての側面に、強い関心が払われている一方で、その作品の多くを占める「非辺塞詩」とも言うべきものにも少なからぬ注意が傾けられ、今日に至っている。

「春夢―春の夢」と題する作品も、そうした作品の一つである。

洞房昨夜春風起 洞房 昨夜 春風起こり
遙憶美人湘江水 遙かに美人を憶ふ 湘江の水
枕上片時春夢中 枕上 片時 春夢の中
行尽江南数千里 行き尽くす 江南 数千里

この作品は、中国においては『河岳英靈集』以来、比較的多くの詞華集に収載され、今日でも少なからぬ人々によって注釈が加えら

れているが、我が国では、その例が極めて少ない^②。そこで、この作品を解釈するにあたっては、より多く中国の注釈書を参考にすることとなるのだが、その注釈書の大部分の示した「伝統的」な見解に、少なからぬ疑問を覚え、しかも異説を唱える声があまりに小さい事に不満を持った。

一

思いつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
『古今和歌集』巻十二に収める、小野小町の歌では、「人」は思
う人であり、それは恋の歌であるとされている^③。

「春夢」と題する岑参の作品を一読した時、筆者が連想したのは、
右に示した小野小町の歌であった。恐らく、このような歌を伝統と
して有する我が国の人々の中で、同様な感想を抱くのは、筆者一人
ではないのではなからうか。

ところが、中国の多くの人々はそう見ない。

劉開揚『岑参詩選』では、概ね次の二点を理由として、この作
品が恋愛をうたったものであることを否定し、友人を思ふ詩である
とする。

(1) 「遥憶美人」は、『文苑英華』(卷一五七)に、「一に故人尚
隔に作る」とあるが、このことから「美人」とは「故人」

(友人)を指す可能性が考えられる。

(2) それは例えば、王昌齡の「同從弟銷南齋玩月憶

山陰崔国輔」詩に、「美人清江畔、是時越吟苦」とあるが、ここに言う美人が崔国輔その人であるという例のあ
ることからも明らかである。

右の論拠を検証したい。

まず(1)についてであるが、今日我々が比較的容易にこの作品を見
ることのできる、古典のテキストは、次の十一種である。

- ①唐、殷璠『河岳英靈集』中
- ②五代・蜀、韋毅『才調集』七
- ③宋、李昉ら奉勅撰『文苑英華』一五七
- ④宋、姚鉉『唐文粹』一五
- ⑤宋、計有功『唐詩紀事』一三三
- ⑥明、趙宦光・黃習遠『万首唐人絶句』一二
- ⑦明、高棅『唐詩品彙』四八
- ⑧清、彭定求ら奉勅撰『全唐詩』二〇一——以上、総集
- ⑨『岑嘉州詩』七(明、正徳庚辰(一五二〇年)濟南刊本、四部叢刊初篇影印)
- ⑩『岑嘉州集』八(唐五十家詩集)五、明、銅活字本、上海古籍出版社影印、一九八一年
- ⑪『岑嘉州詩』八(浣上菊隱点、日本、京都天王寺屋市郎兵衛刊本、寛保元年(一七四二)、『和刻本漢詩集成 唐詩篇』第五輯、汲古書院影印、一九七五年)——以上、別集

これらのうち、劉氏の指摘以外に、その本文を「遥憶美人」では
なく「故人尚隔」に作っているのは、⑤『唐詩紀事』、⑧『全唐詩』、
そして⑩『和刻本岑嘉州詩』の三種であった。

劉氏が特に『文苑英華』の、「一に『故人尚隔』に作る」という

記述を重視したのは、奉勅撰という権威ある、しかも宋代に成立した総集に、既に「故人尚隔」とするテキストの存在が指摘されていたからであろう。「故人なほ隔つ 湘江の水」——これが岑参のオリジナルを伝えているとしたならば、この作品は当然、唐詩に多く見られる典型的な友愛の詩と解釈すべきものとなる。まして、時代は下つても、奉勅撰という点では共通している『全唐詩』本文に「故人尚隔」と記載されているのであつてみれば、その本文の可能性も、否定し難い影響力を持つことになるであらう。

(2) について。今日でこそ、「美人」(もしくは「佳人」ということばは、女性を示す語として定着しているが、古くは、男女を問はず用いられ、容姿の美しさのみならず、賢人、有徳の人などを指すものであつた。

○其弟美人也。愛弟非愛美人也(『墨子』卷十一「小取」)

○西方美人、彼美人兮、西方之人兮(『詩経』邶風「簡兮」)

〔後漢、鄭玄箋〕彼美人謂碩人也。

○望美人兮未來(『楚辭』九歌「小司命」)

〔後漢、王逸注〕美人謂司命。

○惟佳人之永都兮(『楚辭』九章「悲回風」)

〔王逸注〕佳人謂懷襄王也。

○朝与佳人期、日夕殊不來(魏、文帝「秋胡行」)

○美人遊不還、佳期何由敦(南朝・宋、謝靈運「石門新營所住四面高山、廻溪石瀨、脩竹茂林」)

岑参「春夢」詩解釈存疑

さらに、明らかに女性のことをうたったとしても、そこに作者が何らかの寓意をこめる——或いは何らかの寓意をこめていると見る——伝統を、この国は有する。

美女妖且閑 美女妖かつ閑なり

采桑岐路間 桑を采る 岐路の間

柔条紛冉冉 柔条 紛として冉冉たり

葉落何翩翩 葉落 何ぞ翩翩たる

(中略)

衆人何嗷嗷 (衆人 何ぞ嗷嗷たる

安知彼所觀 安んぞ彼の觀る所を知らん

盛年処房室 盛年にして房室に処り

中夜起長歎 中夜 起ちて長歎す

(魏、曹植「美女篇」)

美女が世人に騒がれながらも、夫となるべき人を選びつつ、なおわびしく暮らす、というのが表面にうたわれた内容である。しかし、これは、才能のある人が、才能を認められながらも仕えることのできない歎きを、美女に託してうたったものと理解されているのである。

以上、劉氏の示した二点の論拠について見てきたわけであるが、他の概ねの注釈者の態度も、「春夢」詩を恋愛詩と見ることに否定的で、友人を思う詩と見為すという点では、劉氏の説と同じである。

しかも、そうした見解を示すに際しては、敢て理由を述べるものは、文字通り、数えるほどに過ぎない。

それは何故か——答えは、この国の、詩を作り、その作品を愛容する背景となった「伝統」に存しよう。

この国の伝統では、愛情、とりわけ作者自身の恋愛体験を、一人称的な視点から主體的に作ることに、ある種の禁忌を持つて来た。その最大の要因は、この国の人々を長く拘束した礼教の存在が上げられよう。詩作をし、詩を愛容し得るだけの知識と教養を持った人——士大夫——であれば、たてまえて、その拘束に従わねばならない。礼教に従つてこそ——或いは表面だけでも従つて見せてこそ——士大夫は士大夫たり得るからである。

もちろん、中国の古典詩に恋愛詩が皆無というわけではない。作者自身が直接に関与しない三人称的な視点から三人称的な女性を描くという形の恋愛詩は極めて多く存在する。だが、左に示す晩唐の詩人、趙嘏の「江楼書感」——江楼にて感を書す」のような例は必ずしも多くない。

独上江楼思渺然 独り江楼かうろうに上れば 思ひ渺然ぼうぜん
月光如水水連天 月光 水の如く 水 天に連なる
同来翫月人何処 同もてあそに來たりて 月を翫あそびし 人は何れの処

風景依稀似去年 風景 依稀いさとして去年に似たり

我が国、江戸期の服部南郭は、伝統的解釈に従つて「人」を知音

（親友）と見ているが、『唐詩紀事』（五六）や五代・南漢、王定保『唐摭言』（二五）、或いは元、辛文房『唐才子伝』（七）などに、作者と愛姫との悲恋の逸話が載せられていることから、「人」とはその愛姫を指すとの説が広く行われている。

この作品のように、作者の一人称的な恋愛詩が、そうした作品に禁忌を持つ伝統の中で、比較的早期から人々に認知されたのは、作者の悲恋という、いわば免罪符の存在が大きく関わっているであろう。しかし、「春夢」詩には、右の例をそのまま適用することはできない。何となれば、作者の岑参には、恋愛にまつわる有名な逸話が伝えられていないからである。

従つて、岑参が、伝統を重んじ、礼教に忠実たるべき士大夫である限り、その作品である「春夢」詩もまた、伝統の闕内に置いて解釈すべきである、というのが大方の注釈者たちの見解とすることができる。

このほか、美人友人説を「補強」する指摘も存在する。それは「春夢」詩の第二句「遥憶美人湘江水」が、魏、曹植の「雜詩」（六首其ノ四）の第一句から第四句をふまえているという指摘である。

南国有佳人 南国に佳人あり
容華若桃李 容華 桃李たなしの若し
朝遊江北岸 朝あさに江北かほの岸に遊ぶ
日夕宿湘止 日夕ひゆふに 湘止しやうしに宿る

時俗薄朱顔

時俗一朱顔を薄んず

誰為發皓齒

誰が為にか皓齒を發かん

俛仰歲將暮

俛仰にして一歳將に暮れんとす

榮耀難久恃

榮耀も久しくは恃み難し

『文選』卷二九に収載される右の詩は、打ち棄てられて顧みられない「佳人」をうたいながら、その裏には、才能ある人が用いられぬ歎きがこめられているとする。

「春夢」詩が、この作品をふまえているとしたならば、それがどれほどかが問題にならう。或いは「美人」の性別に関係なく、文字や情景の共通性から、こうした指摘が為されたかとも考えられる。が、ここで「春夢」詩を友人を思う詩と見る立場からすれば、用語だけではなく、「雜詩」が結局は男性のことをうたつていているという点をもふまえていると見るべきであろう。

二

こうした伝統的解釈の立場から見れば、「美人」は当然男性であり、「春夢」詩が友人をうたつた作品であると結論づけるのは至極当然のこととなる。その結果として、多くの注釈者たちは、そうした「自明の常識」に敢て説明を勞する必要を認めず、「美人は故人を指す」——或いはまた、この作品は友人を指すとのみ記し、他の可能性についても言及しなかったであろう。

しかし、本当に他の解釈の成立する余地が全くないのであろうか。さらには、伝統的解釈が、それほど完璧なのであろうか——これが

岑参「春夢」詩解釈存疑

本稿一で見た伝統的解釈に対する素朴な疑問である。

今度は、別の角度から劉氏の説等を見直すこととした。

まず、第二句目「遥憶美人」を「故人尚隔」とするテキストが、古くから存在するという指摘について。

確かに、宋、計有功『唐詩紀事』をはじめとする数種のテキストが「故人尚隔」としていた。しかも、唐詩を見ようとすれば、まず依拠する『文苑英華』（ここでは〔注〕であったが）、そして『全唐詩』の「権威」による裏付けもあった。

しかし、岑参と同じ時期の人である殷璠の『河岳英靈集』をはじめ、五代・蜀、韋毅『才調集』、『文苑英華』（本文）など、ほとんどのテキストが「遥憶美人」としていることは無視できない。

また、「美人」（佳人）が、女性ばかりではなく男性をも指すことは先に示した例によつても知ることができるのだが、それが直ちに友人と結びつくかどうかとも考えねばならない。

中国の古典詩には、劉氏の指摘した作品のみならず、友人を思う作品が数多くあることは確かである。その思う友人を「美人」（佳人）とする作品も、劉氏の示した例以外にも少なからずあることもまた事実である。

けれども、「春夢」詩の場合は、それらの例とは異なり、詩題や本文から、「美人」が友人でなければならぬとする必然性は見出し得ないと言つて良い。仮に伝統的解釈に従えばそうなるとの主張があつたとしても、伝統に即して類推できるのは、あくまでも「美人」（佳人）が男性を指す可能性が大きいこと、その男性が時として友人を指す場合があることであつて、多くの注釈者のように、そ

れ以外の解釈を認めないほど絶対的解釈ではあり得まい。

そして「春夢」詩の第二句「遙憶美人湘江水」という句が典故としてふまえた指摘される魏、曹植「雜詩」の「南国有佳人——日夕宿湘沚」が、時代の推移と共に典故としてのふまえられ方に變化を来たしていることも見逃してはならない。その本来の姿は、表面的には打ち棄てて顧みられない女性をうたいながら、その裏に、用いられない不遇な才子の歎きをこめたものとされた。ところが、時代が経つにつれ、その寓意はいつしか閑却され、やがては単に美女そのものをうたう場合の典故とされるに至つたとされる。

これによって、「美人」(佳人)が男性を指す可能性が高くとも、女性を指す可能性も全く否定されたわけではないということになる。

唐詩の中にも「美人」(佳人)が女性そのものを指し、その裏に何らの寓意もこめられていない、次のような作品も存することを思つたとき、伝統的解釈も必ずしも完璧なものとは言えないことになろう。

此地曾經翠輦過 此地 曾經 翠輦 過る
 浮雲流水竟如何 浮雲 流水 竟に如何
 香銷南国美人尽 香は南国に銷して 美人尽き
 怨入東風芳草多 怨みは東風に入りて 芳草多し
 残柳宮前空露葉 残柳 宮前 露葉空しく
 夕陽江上浩烟波 夕陽 江上 煙波 浩たり
 行人遙起広陵思 行人 遙かに起こす 広陵の思ひ

古渡月明聞棹歌 古渡 月明らかにして 棹歌を聞く

(劉滄「經二場帝行宮」)

以上の三点から、伝統的解釈も必ずしも完璧ではなく、他の解釈の成り立つ余地が存すると言えよう。

三

伝統的解釈から離れて、この作品を解釈するとしたならば、どのような可能性が生じ得るであろうか。

清、唐汝詢は、「唐詩解」において、

- ①この「美人」は必ずや具体的な人物を指していよう。
- ②その人物は、『詩經』鄘風「桑中」に示された、衛の国の娘の類である。

とし、「美人」を女性にとらえ、この作品を作者の恋愛経験をふまえた、第一人称的恋愛詩と見ている。

爰采唐矣 爰に唐を采る
 沫之郷矣 沫の郷に
 云誰之思 ここに誰をか これ思ふ
 美孟姜矣 美なる孟姜
 ……………
 (『詩經』鄘風「桑中」)

古典的解釈に従えば、衛の公室は淫乱で、身分の上下を問わず互いの妻妾と通じ、桑中の野（今の河北省濮陽県の付近）に密会したとする。

爾来、「桑中」と言えば、男女がひそかに逢引きをすることを称することとなったが、「洞房（奥まった部屋）」でひとり眠る作者の枕辺に結ぶ春の夢が恋の夢であったとしたら、今日の異国の民である我々にも、はなはだ解り易いと言えは解り易い。

我が国でもなじみ深い『三体詩』（巻一）に載せる次の作品は、「春夢」詩と同じく春の夢をうたい、比較的早い時期から女性を思う詩と解釈されている。

酷憐風月為多情 酷だ風月を憐れむは多情なるが為なり
還到春時別恨生 還た春時に到つて 別恨生ず
倚柱尋思倍惆悵 柱に倚りて尋思すれば倍惆悵たり
一場春夢不分明 一場の春夢 分明ならず

（張偃「奇人」）

この作品も、古くは「春夢」詩と同じく、友人を思う詩とされたが、我が国、江戸期の説（雪）心慈宣（素隠）は、『三体詩素隠抄』（上）において「妻ノ処ヘヨスル詩ナリ。旅ニテノ作ナリ。」とした。さらに、村上哲見『三体詩』（一）では、

- ①「人」とはしばしばある特定の人を指す。
ここはおそらくはおもい人であろう。

岑参「春夢」詩解釈存疑

②第一句を旧訓はみな、「多情」を風月にかけるが、風月をはなはだしく憐れむには（自分が）多情なるゆえだ、とどこまでも作者自身を主にしていうと考える方が良いであろう。

とし、この作品を（一人称的）恋愛詩とする。

もちろん、この作品と「春夢」詩とが良く似た構想であるからといって、「春夢」詩を男性が女性をおもう詩であると断定するのは短絡的に過ぎようが、似た構想の、しかも「春夢」詩と思じ唐代の作品が、恋愛詩と解釈されていることは見過ごしにできないであろう。伝統的解釈が必ずしも完璧たりえぬ以上、他の解釈が成立する可能性があるからである。たとえ伝統的見地と真正面から対立しようとも——さらには、本稿一で見たような問題がその説にあるうとも——「春夢」詩を、男性が女性を思う詩と見為すことは不可能ではない。

しかし、右のように「春夢」詩を男性が女性を思う詩と見為す可能性は生じて、

- ①たてまえてとして、一人称の恋愛詩を認めないという伝統にそむくという点
②作者である岑参に恋愛にまつわる有名な逸話が残されていないという点

が、いわばこの説のアキレス腱となっていることは否めない。その

辺が、伝統的解釈を奉ずる人々からの批判材料となり、劉開揚『岑參詩選』では、唐汝詢の説を紹介した後、「恐らく、その説は誤まりであろう」としている。

とすれば、ここではやはり、伝統に即しつつ、しかも従来の説とは別の可能性を示す、という解釈が望まれるのではなからうか。

四

この問題を解く鍵は、「春夢」詩中の「洞房」という語であろう。

「洞房」は、一般的には奥深い部屋を指す語とされるが、婦人部屋（閨房）をも指す語である。

○ 娉容修態廻洞房些、蛾眉曼睩目騰光些（『楚辭』招魂）

○ 洞房叫窸而幽邃（後漢、王廷壽「魯、靈光殿賦」）

○ 甲第崇高闈、洞房結阿閣（晉、陸機「君子有所思行」）

○ 洞房殊未曉、清光信悠悠（梁、沈約「應王中丞思遠詠月」）

○ 往年曾約鬱金牀、往年曾て約す、鬱金の牀

懷裏不知金鈿落、懷裏、知らず、金鈿の落つるを

暗中唯覺繡鞦香、暗中、唯だ覚ゆ、繡鞦の香ばしさを

……………
(唐、韓偓「五更」)

「春夢」詩における「洞房」を、右に示した例のように婦人部屋とするなら、その解釈は従来とは異なったものとなる。すなわち、従来の解釈では、洞房（この説では奥まった部屋）で夢を見るのは

あくまで岑參であった。ところが、洞房が婦人部屋であったならば、夢を見るのは女性であり、美人はすなわち、その女性のおもう人（男性）ということになるからである。

今回、筆者が調査した「春夢」詩の注釈書のうち、『美人』は誰かについて言及しているものは十九種⁽²¹⁾。そのうち、『誰が「美人」を夢見ているか』について、その主語を「女性」と見たのは、次の三種であった。

① 劉逸成「唐詩小札」 ② 高光復「高適岑參詩校注」 ③ 劉學

錯ほか「唐代絶句賞析・続篇」

但し、このうち①は、「ひよつとしたら女性かも知れない——也許就是一箇女子吧」と述べるのみで、確たる理由を述べず、ようやく②と③において、「洞房」を婦人部屋と見ることによって、女性⁽²²⁾が男性を夢に見る詩であろうとしている。

十九種の注釈書のうち、わずかに二種の示した見解とは言え、ここではそのいわば小さな声に、もつと耳を傾ける必要があるのではなからうか。

何故なら、女性が男性を夢に見るといふ——或いは遠くに居る夫、或いは恋人を思うといふ三人称的構想こそは、一人称的恋愛詩に原則として禁忌を持つ中国の伝統の中で、かなり早い時期から認知されて来た「閨怨詩」のそれに連なるからである。⁽²³⁾

その閨怨詩のうち、遠くにある男性を夢に見るといふ内容を持つ作品は、今日伝えられているものとしては、『文選』卷二二に収め

る漢代の楽府「飲馬長城窟行」にまで遡ることができる。

青青河边草

縣縣思遠道

遠道不可思

夙昔夢見之

夢見在我傍

忽覺在佗鄉

佗鄉各異界

輾轉不可見

青青たり 河辺の草

縣縣として遠道を思ふ

遠道 思ふべからざるも

夙昔 夢に之を見る

夢に見ては我が傍に在れども

忽として覺むれば佗郷に在り

佗郷 各 界を異にし

輾轉するも見るべからず

また、男性の作者が女性の代りに、その気持ちをつたうというのも、閨怨詩においては最も普遍的なパターンとして、その例を見出すことができる。「春夢」詩の作者である岑参と、ほぼ同時代を生きた李白の「子夜呉歌（四首其ノ三）」は、その最も良く知られた例の一つである。

長安一片月

万戸擣衣声

秋風吹不尽

総是玉関情

何日平胡虜

良人罷遠征

長安 一片の月

万戸 衣を擣つ声

秋風吹いて尽さず

総べて是れ玉関の情

何れの日か胡虜を平らげ

良人 遠征を罷めん

さらにまた、「春には女思ひ、秋には士悲しむ——春女思、秋士悲」

（「淮南子」繆称訓）ということば通り、春に夢見るのは、女性こそが、或いはよりふさわしいと言えるのではなからうか。

「春にもの思う女性」をうたうのは、『詩経』以来の伝統である。

野有死麋

白茅包之

有女懷春

吉士誘之

野に死麋有り

白茅もて 之を包む

有女有り 春を懐へば

吉士 之を誘ふ

（『詩経』召南「野有死麋」）

「春夢」詩をどのようにとらえるか、今後このほかにも解釈の可能性が示されるかも知れない。しかし、現段階では、「閨怨の女性が、遠い江南の男性（美人）を思う詩」と見るのが、より実態に近いと言えるのではなからうか。

結 語

以上、「春夢」詩について、従来大半を占めて来た伝統的解釈への疑問と批判、および別個の解釈の可能性二種を述べて来た。

もちろん、ここで検討して来た三種の解釈のうち、いずれか一つを「正しい」と断定するには、「春夢」詩は決定的な手がかりを欠いていると言わねばならない。本稿四において示した見解も、より実態に近からうという可能性を示し得ても、それを絶対と述べるには、必ずしも十分ではない。

従つて、ここに示した三種の解釈のいずれを是と見るか、或いは全てを否定して新たな見解を示すかは、最終的には読者の判断に委ねられることになる。

或いはむしろ、このように、決定的証拠を持たず、さまざまな解釈を成り立たせ得るところに、この作品の「魅力」が有ると言うべきであらうか。

本稿の最後に指摘しておきたいことは、たとえ伝統にのつとつた通説に従う場合でも、旧来の説に無批判であることの危険性である。

本稿で見た、従来の主流的な解釈が、三説の中で仮に正鵠を射ているにしても、大部分の注釈者の「論議無用」的な態度は、少なくとも注釈書としては不十分だと言わねばならない。

「常識」「自明なこと」を一通り検討した後には作品と向いあつてこそ、それまでとは違う視点も見えて来る。その上で、「常識」「自明」の解釈に戻つたとしても、それはそれで十分な説得力をもつであらう。本稿があえて「存疑」の意を呈する所以も、またここに存すると云つて良い。

※小稿は、現在執筆中の『続校注 唐詩解釈辞典』（大修館書店）の執筆課程に生じた疑問を出発点とする。出版の暁には小稿と相補うことと思う。

※小稿が成るにあつては、弘前大学の植木久行教授、恩師である早稲田大学の松浦友久教授から助言と資料の提供をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(注)

(1) この問題については、拙稿「岑参詩に対する評語『奇』の解決をめぐる」(『中国詩文論叢』第六集、中国詩文研究会、一九八七年六月)を参照されたい。

(2) ① 江戸、東塾(夢亭)『唐詩正声箋註』巻七(和刻本漢詩集成 総集篇 第三輯、汲古書院影印、一九七八年) ② 松枝茂夫『中国名詩選(中)』(岩波文庫、一九八四年第一刷) ③ 松浦友久『中国名詩集』(朝日文庫、一九九二年一月刊行予定)。

このように注釈書が我が国で少ないのは、一つには『三体詩』、『唐詩選』、そして『唐詩三百首』などの我々になじみ深い詞華集に、この作品が収載されていないことが関連している。

(3) 山口博『愛の歌——日本と中国』(ドナルド・キーンほか『叢刊・日本の文学1』、新典社、一九八九年)では、『古今和歌集』中最も日本の歌人とされる小野小町の作品に、中国の古典詩の一ジャンルである閨怨詩の影響を指摘し、この歌もその典型とする。

(4) 四川文芸出版社、一九八六年。

(5) 『全唐詩』巻一四〇。但し、「崔国輔」は「崔少府」に作る。少府は県尉の別称であり、当時の崔国輔の官名である。

(6) 『文苑英華』一作「故人尚隔」、美人即称故人。如王昌龄「同従弟銷南斎玩月憶山陰崔国輔」(『岑参詩選』二四九頁)。

(7) 劉氏は「遙憶美人」という記載によりながらも、「故人尚隔」というテキストの存在を示すことによって、自説の論拠として

いるのだが、「故人尚隔」が正しいとする注釈書も存在する。筆者が見るを得たものは、次の六種である。

- ①劉逸生『唐詩札記』（広東人民出版社、一九六一年第一版、一九七八年第八次印刷）
- ②中国社会科学院文学研究所『唐詩選』（人民文学出版社、一九七八年第一次印刷、一九八六年第五次印刷）
- ③房開江・潘中心『唐人絶句五百首』（貴州人民出版社、一九八一年第一版、一九八二年第三次印刷）
- ④程千帆・沈祖棻『古詩今選』（上海古籍出版社、一九八三年）
- ⑤吳奔星『歷代抒情詩選』（湖南人民出版社、一九八三年）
- ⑥上海古籍出版社『歷代情詩』（同出版社、一九九〇年）

これらのうち、①と⑥を除いた四種は「春夢」を友を思う詩とし、①、⑥は他の可能性を示すものの、理由をほとんど明確にせず、その判断にある種の躊躇が見てとれる（詳細は後述）。

(8) 碩人とは大徳の人、偉人。

(9) 司命とは神の名。人の寿命をつかさどるといふ（大司命）王逸注。

(10) 宋、郭茂倩『樂府詩集』卷三六所収。なお「秋胡行」は、漢、劉向『列女伝』卷五などに見える逸話を詠じた樂府題。「佳人」は夫を指す。

(11) 『文選』卷三〇所収。

(12) 『文選』卷二十七所収。「妖且閑」は、なまめかしく、そのうえみやびやか。「柔条」は柔らかな枝。「冉冉」は盛んな様子。

(13) 銑曰、以美女喻君子。言君子既有美行、上人雖見微求、終不能

岑參「春夢」詩解釈存疑

屈（唐、張銑の説。『六臣注文選』）。

(14) このうち、本稿の注(2)に示した松浦友久『中国名詩集』は、さまざまな可能性を検討した上で、「春夢」詩を友愛の詩と結論づけている。極めて稀な例と言って良い。

(15) 松浦友久「唐詩に表われた女性像と女性観——閨怨詩の意味するもの——」（石川忠久編『中国文学の女性像』、汲古書院、一九八二年三月）。同論文は、松浦友久『中国詩歌原論』（大修館書店、一九八六年）の第一部「一、詩と性愛」に再録されている。

(16) 『全唐詩』卷五五〇。

(17) 『唐詩選国字解』七言絶句（漢籍国字解、早稲田大学出版部、一九一〇年）。

(18) 詳しくは、増子執筆担当の、「江楼書感」（松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』、大修館書店、一九八七年、二五七頁）を参照されたい。

(19) 本稿の注(2)引く『唐詩正声箋註』の指摘。

(20) 此六篇、並託喻傷政急、朋友道絶、賢人為人窃勢、別京已後、在郢城思郷而作（『雜詩』六首の冒頭に付せられた李善注）。なお、ここでは「郢城」（湖北省江陵の東南）としているが、「郢城」すなわち今日の山東省西部の地とすべきとされる（花房英樹『文選』四、全釈漢文体系一九、集英社、一九八六年第五刷、二九八頁）。

(21) 例えば、李白「早春寄王漢陽」に「美人不来空断腸」とある「美人」は王漢陽——漢陽の県令であった王氏——を指す（全

唐詩』卷一七三。

(22) 曹植有詩以南国佳人為寄託。后因用作詠美女典故(范之麟ほか『全唐詩典故辭典』下、湖北辭書出版社、一九八九年、一四一四頁)。

(23) 『全唐詩』卷五八六。

(24) 此美人必有所指、意亦桑中衛女之倩耳(卷二七)。

(25) 卷二(中田祝夫『抄物体系、勉誠社、一九七七年)。

(26) 『中国古典選』二九(文庫版、朝日新聞社、一九七八年、一二三頁)。

(27) 『文選』卷十一。

(28) 『文選』卷二八。

(29) 『文選』卷三〇。

(30) 『全唐詩』卷六八三。

(31) 本稿の注(2)、(6)に示した九種および、「春夢」を、作者の一人称的恋愛詩と見た清、唐汝詢『唐詩解』のほかに次の九種がある。

- ① 清、王翼雲『古唐詩合解』(台北、文化圖書公司、一九七〇年)
- ② 陳鉄民・侯忠義『岑參集校注』(上海古籍出版社、一九八一年)
- ③ 黄肅秋ほか『唐人絶句選』(新華書店北京發行所、一九八二年)
- ④ 肅滌非ほか『唐詩鑑賞辞典』(上海辭書出版社、一九八三年)
- ⑤ 高光復『高適岑參詩訳釈』(黒竜江人民出版社、一九八四年)
- ⑥ 劉学鍇ほか『唐代絶句賞析・続篇』(安徽文芸出版社、一九八五年)
- ⑦ 富寿蓀ほか『千首唐人絶句』上(上海古籍出版社、一九八五年)

⑧ 劉開揚『岑參詩選』(既出)

⑨ 潘仲華ほか『全唐詩精華分類鑑賞集成』(河海大学出版社、一九八九年)。

(32) 『洞房』を、一般に婦人部屋を指すと指摘しながら、結局友人を思う詩としているものがある(房開江・潘中心『唐人絶句五百首』程千帆・沈祖棻『古詩今選』、吳奔星『歷代抒情詩選』)。これらは、テキストとして扱った『全唐詩』に「故人尚隔」とあるのに影響されたものであろう。

(33) 閨怨詩は、伝説の帝舜の時代に、塗山氏の女が禹を慕って作ったという「塗山歌」をその始めとするとされている。が、それともかくとして、『詩経』国風に数多く見られて以来、詩史と共に在るジャンルであることは確かである。

(34) 例えば、「洞房」がこの場合、婦人部屋とするのが適切であるか。或いは、春に友人を夢に見るといふ作品の存在——裴説『早春華下の同志に寄す(早春寄華下同志)』(『三體詩』卷三)。但し、『全唐詩』卷七五七には、湯悦の作としてこの作品を載せる——なども、無視し去るにはあまりに重いものを持っていると言えよう。